

のではありませぬから、幼稚園外に於ける子供、即ち、家庭に於ける子供を知らねばなりません。子供が自由に遊んで、己れ自身をその儘に發表して居る時に、其子供を知ると同時に、また、その境遇や、その受けて居る感化を大略察することが出来ませぬけれど、それだけでは判然しない事が澤山あるのです。幼稚園で預かつて居る僅の時間中に研究しただけでは、決して十分といふ事が出来ませぬ。どうしても家庭と密接の關係をつくり、家庭内に於ける子供の有様をもよく知つて、家庭と幼稚園とが一致協力して、其子供の善き發達を計らねばなりません。子供の教育は、家庭が主なので、幼稚園は、唯その缺を補ふやうなものですから、どうしても家庭との深い關係を絶つ事は出来ませぬ。(文責記者)

○初雪や子供の持てあるくほど (千代)  
○女の童と男の童と遊ぶ火燵哉 (子規)

## 小兒の傳染病に就いて(一)

醫學士 唐澤 光徳

一四

今日には幼稚園時代、即ち小兒の四五歳頃から七八歳位の間に一番多く來る所の傳染病の御話を申し上げることに致しました。

此の會は醫學には専門の會でありませぬから、症候其他に就て餘り精しいことは略しまして、幼稚園に來て居つて病氣が始まる前に注意すべきこととの、又癒つて幼稚園に來た時分に、其の取扱を爲さる保護者として氣を付けべきこと等に就て一寸御話しようと思ひます。

一體極端に申しますと云ふと、幼稚園と云ふものは一種の病氣の間屋のやうな形がある。少し亂暴な言ひ方でございますが、大に注意を要することでありませぬ。全體醫者の方で非常に嚴重にすれば、病氣が全く治り切らない中に子供を幼稚園に寄越すと云ふやうなこともありませぬし、又幼稚園の

方にも相當學識ある小兒科醫者が園醫として勤めて居るやうですと、直ぐ其の症候を診て、宅へ送り歸へすことも出来ませんが、實際に於ては未ださう云ふことも出来ない爲に、子供を幼稚園にやると屢々傳染病にうつつて來る。それで私も常々さう云ふ風のことを一度御話をして、皆様が注意をして下さつたら大變仕合せであると存じて居りました。

一體傳染病は、一般に申しますと云ふと、皆微菌から來る所の病氣であつて、其の微菌が空氣なり食物なりによつて身體に侵入するのですが、幼稚園で最も氣を付けなければならぬのは、多く空氣から來る傳染病が多く、食べ物の方の少ないのであります。例へば麻疹だとか、水痘、それから風疹、猩紅熱、實扶帝里、さう云ふ風の病氣は主に空氣の媒介に依て來る病氣で、是等は幼稚園で子供から子供に極くうつり易い。中にも殊に一番危険なのは例の百日咳であります。例へば幼稚園

で甲の子供から乙の子供が染つて、不幸にして其乙の家庭に三歳より小さい子供があると、それに感染して、それが爲に乙の家の幼兒が遂に悲惨なる死を遂げるやうな場合があります。是等は即ち間接に家庭に於ける非常な障礙になつて居ります。それでありまますから今日は順々に極く簡単に、一通りの傳染病の御話をして、皆様が之に就て知識を御持ち下さつたならば、單に幼稚園ばかりで無く、子供の家庭の方も大層利益だと思ひます。先づ一番初めに申しますのは、

猩紅熱

此の猩紅熱は、子供の傳染病の中で一番重いもので、是は何う云う譯か日本には今まで割合に少かつた。少くとも明治三十七八年頃までは非常に少い病氣でありましたが、同時に又實が良くて死ぬのが餘程少い傳染病でありました。處が明治三十八九年頃からは、醫者の方の知識も進歩したのか知れませんが、非常に澤山の患者が出て來て去年、

一時年當りは、西洋でも我國でも非常の流行がありました。此病は極く質の悪い流行になりまじり患者の中の四分の一位が亡くなつて仕舞ふ。其の原因は何ふ云ふ細菌で來るか云ふ事は、今日は未だ分りませぬが、兎に角人間から人間に移ると云ふことは立派に分つて居ります。バギンスキーと云ふ教授は之れについて一の細菌を發見して居りますが、それは未だ一般に認めて居りませぬ。此の病氣に罹る者は生憎此の幼稚園頃の三歳から八歳位のが一番多い。此の病の來る途は空氣、食物、衣類と云ふやうなものから來て、子供から子供へとうつつて行くのであります。此病氣に感染してから發病するまでの間は能く分つて居りませぬが、一日位で直ぐ始まることもあり、又長いのは六日七日位も經つて發病するものもある。それから又十四日位經つて始まるものもある。一般にどの傳染病でも病氣が第一の子供から第二の子供に傳染して直ぐ發病するものでない。細菌なら細菌が

氣道なり胃腸なりから身體に入りて直ぐ病氣が起るものでなくして、所謂潜伏期と云ふものがあつて、其の潜伏期が過ぎると初めて熱が出るると云ふ風になつて來るのであります。例へば一人の子供が猩紅熱に罹つて居る。其の子供と一緒に居ると、其の第二の子供にうつつて來る。第二の子供にうつると病氣が起る。此間の時間が病氣の子供と一緒に居つてから早いのが一日、遅いのが十四日、それが即ち潜伏期と名づけるのであります。例へば多勢の子供の中に一人病氣に罹つて休んで居る。今度は次の所に坐つて居る子供に六日なり七日なりして同じ病氣が起つたとする。すると、其の第一の子供から第二の子供に病氣が傳染して、潜伏して居つたのが、六日なり七日なりであつたと云ふことが分るのであります。それで此の猩紅熱なる病氣の初めは、他の熱病と同しく頭痛がして、寒氣を感じ、又喉が痛いといふことを訴へるのが非常に多い。時に依ると吐氣

を催す。何も悪い物を食べたのでなくたい吐くのが多い。(一般に三歳以上八歳位までの子供にもしこういふ吐くことがあつたならば何か重い病氣の元で無いかと氣を付けなければなりません。)其時分に小兒の體温を計つて見ると、高い時には四十度五分、四十一度位になつて、何となく子供が弱つて、懶るさうになつてをる。夜などは眠らない。さう云ふ風になつて來てから、早いのが半日、遅いのも二十四時間經つと云ふと全身の皮膚に發疹を催す。今御廻はしをします、此の蠟細工のやうな、斯う云ふ風な極く一面に眞紅な猩々緋見たやうな發疹を起す。之を能く眼鏡で見ますと一面に紅いのではなくて、極く小さい點位の紅い發疹が皮膚に出來て居る。猩紅熱と云ふのは、即ち猩々緋見たやうな色をすると云ふ所から出た名前で、西洋人の子供であると皮膚が眞白の爲に本統に眞紅になつて猩々緋のやうな非常に綺麗な色を呈するのでありますが、日本人は皮膚が黄色で

ありますから斯う云ふ風の變なブチのやうな猩々色になる。この發疹の一番初めに起るのが大抵頸から胸の當りに起つて來る。いきなり身體中に何處にも此處にも出ると云ふものでは無い。初めに頸から胸當りに出て、それから次いで腹から背中にいで、終には顔手足に來る。手足が一番後で出て來る。其の時分には大抵の患者は咽頭を非常に痛がります。咽頭を開けて見ると、事に依ると實扶帝里のやうに白いものが着いて居る事もあります。實扶帝里と一緒にやつて居るのでは無いかと思ふこともありませす。それから發疹後二日目位ゐになると、此の色が愈よ濃くなつて來て眞に猩々緋の色に近くなつて參ります。此發疹によく似て居りますのは風疹即ち俗に「かざはな」と云ふのでありますが、風疹の方は是れ程眞紅に出ない。モツと雜に出て來る。それから麻疹の時には、是は生憎蠟細工が出來て居りませんから、此の本を後で御廻はしを致しますが、此の圖のやうに、皮

膚に出方が密でない。即ち、發疹の間に健全な皮膚が残つて居る。一つ一つの發疹物を見ても餘程其粒が大きくて、さうしてハッキリして居る。此方の猩紅熱の方でありますと、一面平らに紅くなつて居りますが、麻疹の時は皮膚がつぶだつて居る外に、其病兒の眼が悪い。眼の結膜、粘膜が眞紅になつて、さうして能く涙が出ますから、大抵それで麻疹と猩紅熱とは區別が付きます。次に前申しました猩紅熱の發疹は、早いので七日、遅いので二週間位の續くと此の色が漸次褪せて行つて元の皮膚の色になります。尙其時分でも他の小兒に感染する力を待つてをります。其他この病の一特色は、治り際になると全身の皮が剥けて來ることである。早いのは熱が出てから二週間、遅いのは三週間四週間位から身體の皮が剥げる。其の剥げ方が麻疹と違つて大變に大きい。初めは腕の付け根、頸の周圍、さう云ふ皺の寄る所からして皮が鱗のように剥けて來る。其の皮の剥け方

が麻疹のより大きくて、大きいのは一寸四方位に剥けることもあるし、尙ほ指の先になると手袋のやうに剥けて來るものもある。又足の方になると草履の底のやうに厚く皮が剥ける。此むけた皮膚の片にも非常な感染力がついて居りまして、從つてさう云ふ風な場合に、其の皮の極く小さい粉でも残つて居ると、其の皮からして此の病氣が傳染する。衛生上から言ひますと、之が一番危険なので、極く悪い時分には十分氣を付けて居りますから別に危険も少うござりますが、治り際になつてからして皮が落屑をする。其の時分が一番危険である。近來では大分入釜しくなつて居る爲に、勿論入院して治療を受けるやうになつて居りますが、極く分らない家庭になると、麻疹に類似して居るが爲に麻疹位に思つて、丸で分らないで家でやつて濟まして居る。さう云ふのが随分危険である。知らないで家でやつて居る爲に熱が下がると又幼稚園に寄越すと云ふやうなことがあります

致しますまいか。もしさう云ふのがあつたらば實に危険であります。其危険の程度は私等も能く遭遇しましたが、或る一軒の家で猩紅熱をやる。立派に警察醫も行つて實に嚴重にして、疊の上は特別に油團即ち澁紙のやうなもので敷きまして、入る時には家の者も誰も皆衣服を着更へ、上衣を着て、草履を穿いて入ることにして、其の位嚴重にして置きましたも、其の家に住んで居る中に一年も経つてから其の兄弟が又猩紅熱に罹つたと云ふやうな場合が随分ある。又或る一軒の家では、前に住んで居つた人が猩紅熱に罹つて居つた爲に次に借りて来た者が猩紅熱に罹ることが随分ある。若し不幸にして其の皮の剥けかゝつて居るのが幼稚園にやつて来られると、又他の子供と一緒に遊ぶやうなことがあると其の爲にうつるやうなことも随分出来て来る理窟である。少くとも若し傳染病の疑ひのあつて歸つた子供で治つて来た時分に、若し手足の指などの皮の剥けかゝつた跡か

あつて、未だ十分で無いと云ふやうなことがあつたら相應の醫者に見せない、其の爲にこの危険な病氣が非常に蔓延する。それで治つてからの特徴は詰り皮の剥けて居ると云ふことが一番確かである。殊に初め熱が出てから皮が剥けて仕舞ふまでは大抵三週間から、長いになると六週間位もかゝつて一番終いに何う云ふ所が剥けるかと云ふと、手足の裏と云ふやうな所が一番終いに剥ける故にみな様はさう云ふものに異状があるかないかには餘程御注意を爲さなければなりません。又實際にさう云ふ場合がよくある。相應に病院に入つて居つても、熱が無くなつてから、平素見たやうにピン／＼して来てからも四週間五週間寝かして居ると患者の方でも堪へられなくなつて、湯に入つて歸つても宜いかと云ふやうなことがある。時に依ると、未だ皮の剥けきらない中に歸るのもあるだらうと思ふ。さう云ふ風なのを何も分からなくて直ぐ幼稚園に寄越すと云ふのが無いとも限

らない。

麻疹

前の猩紅熱の方は死にますけれども、麻疹の方は死ぬのは極く少い。小さい満二年以下の子供であると死にますけれども、もう幼稚園に来る位の児童になると、平素餘程弱い子供で無ければ死ぬことは無い。人間の病氣の中で此の位人間から人間にうつるのに極くよくうつる病氣は無い。此麻疹も前に述べた猩紅熱も、一度罹ると二度罹ることは極く稀である。千人に一人位は麻疹を二度患つた、猩紅熱を二度患つたと云ふことがありますけれども、是は極く稀なものである。それですから時に依ると、態々麻疹にうつらして仕舞ふやうな人もある。それで麻疹は皆様もおやりになつて御承知だらうと思ひますが、之も吾々の方から言ふと何う云ふ微菌で起るか未だ其の原因は分つて居らない。やはり前の猩紅熱と同じやうな患者の衣服とか、器物とか、或は患者から出た鼻汗と

か、唾液とか、呼吸等からうつるやうである。此の病は人から人に移つて發熱するのが九日か十日經つと起るらしい。其の時には初めは眼が、此の本の繪にもありますやうに、眼の粘膜が紅くなつて結膜炎を起す。涙が出て眩しいやうな眼をする。熱は猩紅熱より高くは無いが、三十八度九度位あつて、咽頰が悪くなる爲に子供が咳をする。さうして二日目位になると云ふと、段々發疹物が出て来る。其の發疹物は多くやはり顔と胸、頸の廻りが一番早い。初まりには極く少い。五つ、六つ或は二三十位しかない。それが二日目、三日目からは此の繪にあるやうに非常に多く起る。發疹物の種類は、猩紅熱と違つて、此の繪だけでは分りませんが、猩紅熱よりも大きい。其の皮膚の發疹物と發疹物との間には健康の皮膚がありますから斑のやうになつて来る。此の頃は亞求利加のゴブリック氏が千九百二、三年度頃に始めて見出した「コブリックの斑」と申すのがあつて、發疹前に已に

麻疹を診断する事が出来る。即ち何うも麻疹になりはせぬかと思ふても身體に發疹物が無いが、口を開かして見ると、上顎の頬の所に白い留針のやうな極く小さい直徑一分位の眞白の斑點が口の中の粘膜に起つて居るのが分かる。それは今迄調べられた所に依ると、百人中七、八十人位は其の發疹物が起る前にさう云ふ白い斑點が起つて居る。此の「コブリツタの斑」が発見されてから、極く早く麻疹が我々の方で分かるやうになつた。それから後は熱が起つて來て、段々猩紅熱と同じやうな身體中に發疹物が擴がつて來て、約十日位経つと大抵熱は下つて仕舞ふ。此の時はやはり身體から皮が剥けますけれども、大きくは無い。丁度糠のやうに粉になつて皮が剥ける。猩紅熱のやうに片を爲して剥けるやうなことは極く少い。さうして其の發疹物の後には黒い汚點のやうなものを遺しますから、麻疹をやつたと云ふことは一ヶ月位は分かれます。それから彼は、大抵無事に治りますが、唯茲に氣を付けなければならぬのは、非常に弱い瘰癧質の子供などは、麻疹の後に熱が取り切れないで、結核性の腦膜炎を起したり、或は

肺病になることがよくある。それが爲に麻疹と傳染をやはり我々は恐るので、弱い子供には成るだけ年を取つてから麻疹に罹らせようと努めて居るのであります。一遍だけ經過して構はないならば氣を付けるに及ばぬ。ドシ／＼片端からうつらして行くのが簡單かも知れない。けれどもさう云ふやうな弱い小兒もありますから充分の注意を要します。それとモウ一つ氣を付けべきことは、今次話したやうな病氣が何の位の日數を経つたらうつらないか。是非非常に難しい問題で、體に幾日と定める譯に參りませぬけれども、猛紅熱の時である、少くとも身體中の皮が全然剥けて仕舞つて、若し出来るならば二度位湯に入つて、能く身體を洗ひ、衣服も新しいのに更めてから、幼稚園に來て貰つたら大變都合が宜い。さうすれば、感染の虞は略無い。麻疹の方は通常湯に入つただけでは熱が下つて來たからと云つて、湯に入れただけでは、危険で無いと思はれる節もある。少くとも熱が下つて仕舞つてから一週間乃至十日、湯に入つてからも一週間位後になるまで、それまでは遠慮して來て貰つた方が宜いと思ふ。